

---

# 白狼

ふじおか。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白狼

### 【Zコード】

Z3593D

### 【作者名】

ふじおか。

### 【あらすじ】

”P.i.d”による犯罪組織が増える中、学校内でのトラブルを解決していくお話。

## 第五話～「ソノ～（前編）

「この話は前つりが長すぎて書いてこね」チチも読みかえすと長いなあ…と思いまよ。

## 第五話～「ソレ～

「…………」

この沈黙はヒトミのものだ。

部屋割りの後約30分経った所でヒトミはユウの様子を見に行き部屋の様子を見た所で啞然とした。  
玄関に入つてすぐに足の踏み場を探す事になり、リビングに向かうと、

テレビはノイズが走り悲鳴をあげていて、机の上にはビデオが無造作にたくさん置いてある。

さらに床下には元々ここにあつた古雑誌が散乱。

要するにものすく荒らされたような散らかり方だったのだ。

「ヒトミか… もうしたんだ？」

「バツ……」

ユウは耳を急いで塞ぐ。

「バカ――――――」

その声は外にも響いたと言ひ。

- - - - -

夕飯時になつた時にはすでに辺りは暗くなつていた。

「お前…相変わらずカレーなんだな…」

リキトがコウを見て呆れた。

「頭を回す時にはカレーなんだ。日本人なら誰でも知ってるあの偉大なメジヤーリーガーだってよく食べてたって話だ。」

「だからって毎回カレー食べると茶色になるよ?」

ヒトリは嫌味を含んだ口調で言ひ。  
それきの事で頭に来ているらしい。

「とにかく…俺はちょっと探し物があるから後は適当に食べててくれ。なんかあつたら言ってな。」

手をフリフリさせてユウは部屋へと戻った。

「もう…リキト君…レイタ君…人生ゲームやひつ…」

「はっ…はいいつ！」

レイタは心底驚きながら答える。

「俺はあのバカをなだめて引っ張つてくれるわ~」

リキトはそう言つて立ち上るとユウの部屋へと向かつた。

「なんかあの2人変だよね…ホモかしら?」

「それは無いと…」

「まあいいや…さつ…早く人生ゲーム…」

レイタは逃げる方法を考えたが、良い案を絞り込めない自分の頭をポカつと叩いた。

- - - - -

見つからないな…

ボーッと天井を見るとヌツとリキトが出てきた。

「見つかったか？今回の『依頼』の手がかり…」

ユウはハアッとため息をついた。

「秋元から聞いたからついて来たのか…まだ見つかってない。つていうかここにあんのか？つて疑問が生まれてきた。」

「そりか…本とかに挟んであんじやねえのか？」

「パラパラとページをめくねリキト」

「一番最初に考えて逆さまにしたりしたよ」

「ダメダメ」と言わんばかりに言い、ハアッとため息をつく。

「教科書の見開きのところを破つて開くとあつたつしてな!」

「なんかクラスに他人の数学の問題書をそれやつたバカもいたつくな…」

リキトはそんな事もあつたな、と言こながらビビツ破る。

「お、おこ…リキト…? 本当にやつてるのか?」

「本当に? 本当に書いてある?」

「本当に?」

リキトはホラのとコウに見せる。

見るとWEBページのアドレス、  
もつーつせ…

「は…まつとおわ…?」

リキトが掠れてる文字の一文を読む。

欠落してこむのせおせりへく

「じ」と  
「り」

「はじまつとおわつ」  
と書いてあったのだわつ。

その下には「りう」書いてあった。

『か……まがかくれ……ぼでかくれ……。  
そのあ……みつけ……とする……。  
やつらはし……。  
あいつの……。』

ひがしが……ぐぬまえにかみ……がみつかつたらじーじ……のはじ……  
り。

とめ……」となんてでも……こ。』

「なんだこりや……？ オカルトモノの一節か……？  
リキトは言つ。

コウは黙つたまま、下の方を見ていくる。

下の方に上から強い力で押して書いたような跡があったのに気が付き、  
コウは鉛筆で擦つてみる。

すると浮かび上がったのは次の二文。

「悲しみを伝え続けていた。」

「本当になんなんだ……？」

コウは考え込む。

リキトも考えているらしく、座つて腕を組んでいる。

「……」これは置いておこう。

次はこのアドレスに書いてあるページ、見てみないか？

リキトの意見ももつともだ。

コウはケータイを開きアクセスしてみた。

空と太陽が写っている画像が出てきた。

「なんだこりゃ…ただのプロフジやねえか…しかも相当古い。」

最終更新日は2／29。しかも15年前の。

ユウは一通りアクセスしてみた。

BBS、いわゆる

「足跡」を残すページ。

それとは別に友達と絡んでいる掲示板らしきもの。

書いた時の秒数まで表示される一言秒記。

コレに何かあるんではないかと見たが見つからなかった。

「手掛かりナシ…か…」

「んなハズねえよー貸してみろー」

リキトが無理矢理キーを取ろうとする。

「バッ…無理に引っ張るなつ…て！」

ユウがバツと画面を見ると下の方に、まるで隠してあるかのよう  
もつ一つ、浮かび上がった。

「日記…？」

見てみると飛び飛びだが日記が記されていた。

ユウは一つ一つ見ていると、ある日の出来事について書いてあった。

『黄昏の時

木に囲まれた公園

日が暮れた、と人の気が薄れる遊び場

すべり台

見てみ？

『わいよ』

二人の間に沈黙。

「すべり台つて……ここにあつたか？」

ユウの声は震えてる。

「たしか……そこの窓から見えたような気がする……」

トリキト。

二人は窓から外を見てみた。

二人の部屋の明かりが外に漏れた先にすべり台があつた。

「……え？」

二人はそれ以外に言葉が出なかつた。  
音も立てず、すべり台を滑つてはまた上り、滑つてはと繰り返す影  
があつた。

「…えー、ヒコセさん？」

小声のリキト。

「なに…？アレについての質問はナシだ」

ユウも小声で話す。

「なんでだよ！俺はアレ…！」

ユウが慌ててリキトの口を塞ぎ、すべり台を見ると、見なけりや良かつたと思つものを見た。

影がこちらに気付き振り向いた。そして、笑つた。

ゾクッ！

「ウソリキトは窓からバツと離れると、

扉からバンと言ふ音と共に、人の格好のよつた物をしたヒトとは思えないモノが現れた。

ソレは

「手」を伸ばしユウに向かつてきた。

「ダガー！」

ユウはダガーを出して

「手」を刃で切り裂いた。

「ソレ」は痺れで怯み、

「手」を確かめるように元に戻し始めた。

リキトは好機を見逃さなかつた。

「『Hand』！」

リキトがP.i.dを発動し、出したのはグローブ。

とは言つてもボクシングのような物ではなく漫画的にメリケンのよ  
うな構造をしていた。

「ソレ」にグローブで連打を浴びさせて、吹つ飛ぶ。

「これで終いだあ！」

リキトは鉄を強くこすり、摩擦熱で発生させた火花を使って「ソレ」を燃やす。

クルケケケケエ！！

おぞましい叫び声と共に燃えた

「ソレ」は異様な匂いを発し、痙攣している。

「まだ生きていやがるのか……！？」

リキトはふんずけて起き上がりたい事を確かめる。

「『ソレ』…ヒートセレイタが危ない…！」

ユウが叫び、部屋を飛び出す。それに続いてリキトも飛び出した。

クルルルル…

と、ソイツの喉が鳴る。

突然窓を割り、そこから出てきたヤツはヒトミ、レイタと見て、レイタの方に近付いてきた。

「な、何…よ…コレ…？コウのイタズラ…？」

ヒトミはガクガクと震えている。

恐怖で震える、などというのは初めてだなんて考える余裕もなかつた。

それはレイタにも同じ事だつた。頬に割れた窓ガラスで切つた傷についていようがそこから血が出でていようが関係なかつた。  
「ソイツ」はユウ達が逢つたものとは全く別物だつた。

ヒト型をなんとか保つていたというユウ達の方とは違い、こつちは完璧なヒト型だつた。ただし、リキトをも上回る大きさと手から生えている剣のようなものを除けば。

ソイツはその剣を伸ばし、レイタの腕を貫いた。

断末魔とも言えるような叫び声がレイタの口から吐き出される。

「嫌あああーー！」

ヒトミが叫ぶ。

ソイツは手を伸ばしヒトミを壁にドンと押し付けた。

「く……が……つ！」

それだけではなく圧迫し始めた。

本気で潰れるかと思うくらいヒトミの体に圧力がかかる。

ヒトミは声にならない叫びを出し、気を失った。

「ヒトミー・レイター！」

- - - - -

ユウ達が部屋に転がり入ると、ヒト型のヤツに腕を貫かれたレイタと倒れているヒトミを見た。

「んの野郎つ！」「

「危ねえ！ やめろリキト！」

「ソイツ」はもう一つの手から「剣」を作り出し、リキトのメリケンを受け止める。

「ぐう…っ！ 今だ！ ュウ！」

リキトは唸りながら言つ。

ユウはすぐ声に反応し、跳んでダガーを振り落とした。

ガキイーン！

と二つ音と一緒に、ユウ、リキト共々弾き返された。

「くそつ……！ 頭が……！」

「ソイツ」は硬質化したらしく頭を蚯蚓のような形にして力を集めていた。

「くわい...一川里一聞こえてるだろー返事しろー。」

リキトが叫ぶがレイタは反応すらしない。  
刺されたショックで気絶しているらしい。

「ヤツを倒せなきゃ川里は助けられないか！？」

「だったらこれでどうだ！ 二〇・三！」

ユウが出したのはボウガン。しかしボウガンの中でも大きい物。

大きい矢はダガーの”雷電”と同じ原理で電気を留めている物だつた。

「つけえ！」

雷の矢が高速で飛び、  
「ソイツ」に突き刺さる。

が、青い血は流れているが全く効いてもいなかつた。

「なんだ……って……？」

コウは絶句した。

その間にリキトが吹っ飛ばされる。

「リキ……リキー？」

コウは振つ回り回したが同じように吹っ飛びってしまった。

「ソイシ」せよひまた恋かの恋よひとす。

ま…て…

ユウは立ち上がりうとしたが、それも虚しく崩れ落ちてしまった…

## 第五話～「ソレ」～（後書き）

質問があるだらうと考えた事柄を書きます。

何故リキトはコウの裏の顔を知っているか。

非常に、ってか言わなきゃ分からねえよ！  
っていう伏線ではあります、第三話の頭、  
ひつたくりを捕まえたという事を聞いて笑うだけ、という所。  
実はリキトはコウのやっている事を知っていてリキト自身も噂には  
ならないけど同じような事をやっていた、という訳なんですね。

もう一つ。

プロフを15年もほつたらかしで削除されないのか？  
ところはあくまでもフィクションですので気にしないでください。

では、また次の機会に（・・・）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3593d/>

---

白狼

2010年11月17日05時23分発行